1 現代音楽と能

能声楽家の青木涼子です。本稿では私の活動を事例として紹介いたします。東京藝術大学で能楽観世流シテ方を学び，現在は能声楽家として，能の声楽である謡を素材にした作品を，現代音楽の作曲家と作り，世界で公演をしています。2015年度文化庁文化交流使に指名，2019年度第11回「創造する伝統賞」（日本文化藝術財団）を受賞しました。

1 西洋音楽と謡

能は謡と舞で構成された歌舞劇です。舞の印象が強いですが，実は謡という声楽部分が大きな位置を占めています。私は謡の素晴らしさを世界にもっと広めたいと思い，謡の新曲を現代音楽の作曲家と共に作る活動を始めました。

現代音楽とは，西洋クラシック音楽の流れの延線上にある，20世紀から現在に至る音楽のことをいいます。現代音楽では，作曲家が西洋音楽では扱ってこなかった音楽素材を研究，それを用いて作曲してきたという歴史があります。日本の伝統楽器のための新曲も，1950年代以降，現代音楽の作曲家が数多く手がけてきました。その流れをくみ，謡のための作品を作るのに現代音楽が最も適している分野ではないかと考えました。

西洋音楽の声楽と比べると，女性の謡はアルトよりも低い声域です。謡はファルセット（裏声）を用いず，地声で低く謡うという西洋音楽の声楽にはない謡い方をします。謡のこうした異なる声域と歌唱法は，従来の西洋音楽の声楽にはないもので，現代音楽の作曲家にも刺激となり，新しい作品を生み出すきっかけになっているようです。

謡を作曲するに当たって，西洋音楽の作曲家にとって一番難しいのが，謡と西洋音楽の楽譜の違いです。能では楽譜と歌詞が一体になった謡本を用いますが，西洋音楽の楽譜とは違い，音程やリズムの指定もありません。これは師匠からの口伝で学んでいくもので，西洋音楽のように全てを楽譜に記述し，その通り演奏を再現していくというやり方とは違います。日本語を理解して，能の稽古をした人でないと謡本を理解することが難しいため，より多くの作曲家が新作を作曲できるように，2016年にウェブサイト「作曲家のための謡の手引き」を作りました。謡のいろはを日英両語で解説しており，楽譜を見ながら音源を聞くこともできます。

2010年より，世界の作曲家に小編成の曲を委嘱し，世界初演する「現代音楽×能」というシリーズを主催してきました。これまで17ヵ国33名の作曲家に委嘱し，その33曲のうち14曲を6ヵ国で68回演奏しています。2014年には委嘱した曲を中心に，デビューアルバム「能×現代音楽」（ALCD－98）をリリースしました。

委嘱した作曲家の中から，さらに大きなプロジェクトへと発展する例も出ています。イタリアのフェデリコ・ガルデッラ（1979－）は能『錦木』を基にした謡とオーケストラの曲「Two Souls」を作曲，2018年にフィレンツェの五月音楽祭管弦楽団と世界初演後，2019年に広島交響楽団と室内オーケストラ編成で再演しました。

また，パリ在住の作曲家・馬場法子さん（1972－）も重要なコラボレーターの一人です。彼女の謡と弦楽四重奏のための「ハゴロモ・スイート」では，世界三大オーケストラの一つ，オランダのロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団とも共演しました。『源氏物語』葵の巻を題材にしたオペラ《Nopera AOI葵》は，2016年のパリでの世界初演後，2019年に高知県立美術館ホールで日本初演をしました。

フランスの作曲家・オレリアン・デュモン（1980－）も能『安達原』（『黒塚』）に触発されたオペラ作品《秘密の闇》を作曲，2016年にあいちトリエンナーレで世界初演しました。

また，ハンガリーの著名な作曲家・指揮者であるペーテル・エトヴェシュ（1944－）も「くちづけ（Secret Kiss）」を作曲，2019年に世界初演しました。映画化もされているアレッサンドロ・バリッコ（1958－）の『絹』が原作で，19世紀末にフランスの若い商人が，日本へ絹を求めて旅する話です。日本語の台本は，演出家・劇作家の平田オリザさん（1962－）にお願いしました。スウェーデンのイェーテボリを皮切りに，東京，ポルト，マドリード，ベルリン，ケルン，ブダペストで演奏しました。東京では2019年3月に平田さんの演出付きで東京文化会館で上演しました。東京以外はエトヴェシュが指揮をしました。2019年9月にベルリン・フィルハーモニーで，ケルンが本拠地の現代音楽最高峰アンサンブルのムジーク・ファブリークと共に，ムジークフェスト・ベルリン音楽祭でも演奏しました。

このような活動を続ける中で，19ヵ国50名の作曲家が謡の曲を作曲し，私はこの10年間で15ヵ国で公演をしました。今では謡を作曲できる作曲家の国籍は19ヵ国にも及び，彼らは世界的に活躍しています。また，私が世界各地で彼らの曲を演奏することで，謡という日本独自の声楽は私の願った形で世界に広がり始めています。

2 オペラ作品

私にとって重要な作品をご紹介したいと思います。東京音楽大学の客員教授で世界的な作曲家・細川俊夫さん（1955－）のオペラ《二人静 ー海から来た少女ー》という作品です。アンサンブル・アンテルコンタンポランの委嘱によって作曲された1幕1場のオペラで，2017年12月にフィルハーモニー・ド・パリで世界初演しました。平田オリザさんが台本を手がけ，世界初演では演出も担当しました。

平田さんは能『二人静』を下地に，世界各地で続くテロや紛争を背景とした現代の物語を新たに書き下ろしました。地中海の海辺に流れ着いた難民の少女ヘレンに，12世紀の日本に生きた舞手，静御前が乗り移ります。静はかつて有力な武将だった源義経の恋人で，当時彼の子を身ごもっていました。しかし義経が時の権力者で義経の兄である頼朝の命によって，反逆者として捕らえられ殺されてしまい，生まれたばかりの息子も海に沈められ殺されてしまいます。抗い難い暴力の犠牲となった二人の女性の悲劇が，時間と場所を超えて重なり合い，やがて二人の声が一つになっていくというお話です。2017年12月に世界初演されてから，2018年にカナダと韓国で，2020年3月にニューヨークで，それぞれ別の演出家による四つのプロダクションが生まれています。私は全部に出演させていただきました[1)]。

2021年8月22日　細川俊夫《二人静 ー海から来た少女ー》
サントリーホール サマーフェスティバル2021
写真提供：サントリーホール

もう一つ，ご紹介したい作品は，2013年にマドリードのテアトロ・レアル王立劇場で上演した，戦後ドイツを代表する作曲家，ヴォルフガング・リーム（1952－）作曲のオペラ《メキシコの征服》です。現代オペラの重鎮の一人である演出家・ピエール・オーディ（1957－）による新演出で，私はマリンチェという役を演じました。ザルツブルク音楽祭の総監督やパリ・オペラ座の総裁を歴任した，オペラ界の革命家と評されるジェ

ラール・モルティエ（1943－2014）がその当時テアトロ・レアルの総裁を務めていました。《メキシコの征服》も彼の主導で制作が行われており，世界的に注目を集めていました。ただ，彼はがんで2014年にあっという間に亡くなってしまいます。彼の最後のシーズンに関わらせていただいたことを光栄に思っています。

このオペラはアントナン・アルトー（1896－1948）の戯曲を基に，メキシコのアステカ帝国最後の王といわれるモンテスマとスペインの将軍のコルテスの出会いが描かれています。私が演じた役マリンチェは，モンテスマとコルテスの通訳者で，コルテスの愛人でもあった実在したメキシコ人女性です。最終的にスペイン側の勝利に貢献し，メキシコでは裏切り者の代名詞としても知られています。このオペラでのマリンチェの役割は黙役で，身体表現で通訳をする役です。アルトーが能など非西洋演劇の影響を受けていたこともあり，日本の能の役者，そして女性であることからキャスティングされました。初めての大きなプロダクションで驚くことが多かったのですが，とても良い経験で勉強になりました。

3 新型コロナウイルス終息祈願「能声楽奉納」

このように私は海外での公演活動が多いのですが，新型コロナウィルス感染症の影響で公演の中止を余儀なくされました。2020年3月はニューヨークで細川俊夫《二人静 ―海から来た少女―》，エストニアでの新作舞台，マドリードでスペイン国立管弦楽団と共演というツアーの予定でした。ニューヨークでの公演が3月7日で，その数日後にはロックダウンしてしまったので，ぎりぎりのタイミングで開催できました。それから，エストニアに移動してリハーサルをしていましたが，本番の3日前に公演中止が決定し，急いで帰国しました。その後マドリードでも感染が急速に拡大し，そちらの公演も中止となりました。マドリードでは，スペインの作曲家・ホセ・マリア・サンチェス＝ベルドゥ（1968－）による，私がソリストで100人の合唱団とフルオーケストラの曲「Ἐς Φάος（Hacia La Luz）」を世界初演予定でしたが，2022年2月に延期されました。

それ以来，音楽業界は世界中例に漏れず，コンサート活動が難しくなってしまいました。私が主催してきた新作委嘱世界初演シリーズ「現代音楽×能」は公的資金で可能になったものなので，過去のコンサートの模様を皆さんにご覧いただきたいと思い，青木涼子YouTubeチャンネルで無料公開しました。さらに，人とつながるのが困難な状況で，音楽の力で何かできることはないかと考え，新型コロナウイルス終息祈願のための「能声楽奉納」というプロジェクトを立ち上げました。能は神事として神社仏閣で奉納してきた歴史があります。今や世界には，その祈りの芸能とも言える「能」の謡の曲を作ってくれた作曲家たちがいます。「能声楽奉納」は，彼らが作曲してくれた謡の曲を，作曲家が暮らす国の人々に向けて，在宅の演奏家と共にオンラインで奉納演奏するというものです。インターネットを通しての遠隔地同士のリアルタイムでの合奏は，遅延の問題などもあり，難しいとされています。しかし，今回はヤマハオンライン遠隔合奏サービスSYNCROOMを使用することで，合奏が可能になりました。このプロジェクトを行ったのは，感染症流行の中でも演奏活動を続ける方法を模索するためでもあります。

第1回目は5月30日にイタリアのフェデリコ・ガルデッラが作曲した謡とバス・フルートのための「風の声」を，ヨーロッパで被害が一番最初に大きかったイタリアの人々に向けて奉納演奏しました。東京フィルハーモニー交響楽団首席フルート奏者の斎藤和志さんと私はそれぞれ都内の自宅から配信しました。

第2回目は7月4日に馬場法子さんの《Nopera AOI 葵》をフランスに向けて，フルートの斎藤和志さんと打楽器の畑中明香さんと演奏しました。

第3回目は7月11日に開催し，シリーズ初の

海外とのリアルタイムでの遠隔合奏をスペインのチェリスト，アルド・マタと行いました。スペイン在住の作曲家ブルーノ・ドッツァ（1965－）作曲「エウリディーチェ」をスペインの人々に向けて奉納演奏しました。実は SYNCROOM は基本的には国内のみの使用を想定されていて，日本語の仕様しかありません。でも，実際に海外とのセッションを行ってみたら，遅延もなく演奏可能でした。この試みを通して，入国制限中でも海外の演奏家との共演の実現を目指しました。

2020 年 7 月 11 日　第 3 回 新型コロナウイルス終息祈願
「能声楽奉納」スペインのために　　写真：津山寿文

「能声楽奉納」はアーカイブで青木涼子 YouTube チャンネルで視聴可能ですので，ぜひご覧ください。人と会うことが難しい状況ですが，遠く離れた国の人と力を合わせて一つのものを作ることができ，人との繋がりを感じ，感動しました。慣れないことで本当に大変なこともありましたが，たくさんの方から支援もいただくなど，皆さんの温かさを感じることができ，素晴らしい経験をさせていただきました[2)]。

これからも世界のより多くの人たちに「謡」の素晴らしさを知っていただくため活動を続けていきたいと思っています。

1) 2021 年 8 月 22 日「サントリーホール サマーフェスティバル 2021」にてフランスよりアンサンブル・アンテルコンタンポランが招聘され，2017 年パリでの世界初演時のオリジナルメンバーで，細川俊夫《二人静 ―海から来た少女―》の日本初演を行いました。

2) 講義後，ヨーロッパの二つの著名なオーケストラ，ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団（2020 年 12 月 7 日），アンサンブル・ムジークファブリーク（2021 年 2 月 19 日）と共に「能声楽奉納」をオンライン配信しました。朝日新聞，音楽の友，タワーレコードマガジン，ヨーロッパのテレビ局 Arte の人気番組「Hope@Home」に取り上げられるなど，国内外で話題になりました。
また，同じ方法でアンサンブル・アンテルコンタンポランのチェリスト，エリック＝マリア・クテュリエと CD 録音も行いました。東京とパリを繋いでリモート・セッションを行い，両拠点で同時録音したものをミックスし，アルバム「夜の詞 能声楽とチェロのための作品集」（ALCD-131）を 2021 年 9 月 7 日にリリースしました。

【参考ウェブサイト】
ウェブサイト「作曲家のための謡の手引き」
http://ryokoaoki.net/study/

青木涼子 YouTube チャンネル
https://www.youtube.com/c/RyokoAoki

（青木涼子）